



四旬節第 3 主日 (ルカ 13:1-9)

園丁の取り組みに力を合わせる

今週の福音朗読の中で、後半の 6 節から 9 節に目を向けたいと思います。「実のならないいちじくの木のとえ」と呼ばれている箇所です。「実のならないいちじくの木」が私たちであれば、「園丁」はイエス・キリストかも知れません。

ぶどう園の所有者を父なる神と考えるなら、いちじくの木は結果を出す時期が来ていて、いつ切り倒されてもおかしくない。それを、イエスがあわれみを注いで、父なる神の忍耐を引き出そうとしています。

ひよっとすると、「斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる」とルカ 3 章 6 節にあるように、私たちはすぐにでも結果を求められているのかも知れません。

実のならないいちじくの木は、園丁の必死の努力に応えなければなりません。園丁の取り組みに、人間で言えば向き直って、力を合わせなければ、実を結ぶのは無理なのです。これが人間とイエス・キリストに当てはめられているとするなら、人間はイエス・キリストの必死の努力に向き直り、力を合わせる。これしか方法がないということになります。

日々の出来事がどのように前に進むのか、信仰心を持っている人には三つの考えが可能です。一つは、どのようなことも神が決めた通りになるのだから、人間が何をどうしようと変わらないという考え、一つは、神はただ黙って眺めているだけだから、何事も人間が決めて動かさなければならぬという考え、そして最後に何事も神と人間が共に働くことで進んでいくから、神の呼びかけに寛大に応じる必要があるという考えです。

この三つのうち、イエス・キリストは私たちにどれを選んで欲しいのでしょうか。きっと、最後の答え、神と人間が共に働いて物事は進むから、呼びかけに誠実に協力して欲しいと願っているのだと思います。

この数年で、私たちは大きな経験を積みました。一つは献堂百周年です。もしこの計画が、「神が決めた通りになるのだから、人間が何をどうしようと変わらない」と考えていたなら、無事に百周年を迎えることはできなかったでしょう。神と人間が共に働いて、大きな働きを教会の歴史に残したのです。

もしこの百周年が、「神は黙って眺めているだけだ」と考えて人間の思いだけで前に進めようとしていたなら、ああでもないこうでもないと話は前に進まなかったでしょう。「神が喜んでくださる方向を探しながら、進んでいきましょう。」この「共に働く心」があつてこそ、立派に事を成し遂げたのです。

今年の 11 月には、いよいよ 2 度目の教皇来日が実現します。人間の思惑ばかりが見え隠れする来日ではなく、私たちと、神が共に働いて成し遂げる訪問となるように、心から願っています。その時初めて、木は実を実らせ、多くの人がある実りを味わうことができるのです。

四旬節、回心の季節に、私たちはどのように物事を進めようとしているのか、それぞれ考えたいと思います。たとえば黙想会に参加することで、主任司祭は、今年一年田平教会でどのような実りをもたらしたいのか考えます。そのために、神と人とが共に働く形をどのように整えたら良いのか、考える必要があります。

修道会は、修道会が抱えている事業や教会奉仕の中で、どのような実りをもたらしたいのか考えます。そのために、神と人とが共に働く形をどのように整えたら良いのか、考える必要があります。

家庭にあって、それぞれの家族が、どのような実りをもたらしたいのか考えます。そのために、神と人とが共に働く形をどのように整えたら良いのか、考える必要があります。

こうしてそれぞれの場で、私たちは神と共に働く方法を探し求めるのです。決して、道をそれたり、怠惰になったりしてはいけません。「私が計画を進める。私の考える通りに動いてもらう。」あまりに思いが強すぎれば、それは神と共に働く姿から逸れてしまいます。

「私たちがどうしようと、神が決めた通りにしかならないから、何を協力しても同じ。」そんな考えで怠惰に時を過ごすことも注意しなければなりません。必要なことは、神と共に働くこと、力を合わせることです。

神と力を合わせて働くことは、誰も例外ではありません。立ち直りや、回復の途上にある人も、神と力を合わせて努力するとき、実を結びます。どんなに困難な状況からでも、どんなに時間がかかろうとも、私たちと働いてくださるイエス・キリストは共に働いてくださり、父なる神に実りを報告させようとするのです。イエス・キリストの深い憐れみに信頼して、神の国の実りのために共に力を尽くしましょう。